

## 講演 【賤ヶ岳の合戦の時の高山右近】

高山右近に関する疑問として、よく語られることの中に、

“高山右近は、賤ヶ岳の合戦で、中川清秀を見殺しにして、自分だけ助かって逃げ出した！”

— ということが、あります。

本当に そうなのでしょうか。 何とひどいことをする高山右近！ ではないでしょうか！

あ～あ、又、又、結果的に中川清秀が戦死し、右近は生き残ったことを好材料にして、右近非難の大合唱です。

江戸時代に書かれた「賤ヶ岳合戦記」も、「余吾物語」も、「明良洪範」も、「武家列伝」も……、右近が“中川軍を救わず、一戦も交えずに逃走した”として、非難しています。

近代になっても、徳富蘆花のお兄さん・徳富蘇峰のような著名人までもが、「近世日本国民史」の中で、「高山は、信長の時代にも、名ある勇士の一人であった。山崎合戦にも、先陣として、其の手柄も較著(こうちよ)であった。(いちじるしいものであった。) 然るに、今回に限りて、一戦にも及ばず、逃走したのは、何故(なにゆえ)であったろう。…… 意外である。」と記しています。

徳富蘇峰さん。あなたほどの人が、責任ある文章を書き残すんだったら、もっと勉強してくださいよ！

まして、人をおとしめるような内容のものだとしたら、尚更のことでしょう！ 人をおとしめるほどのことを書いておいて、「何故であったろう」「意外である」程度の言葉でしるして、後(あと)の責任を、どのようにしてとられるつもりですか？ 人権問題なのですよ！ ———— といいたいですね。

そして、逆に、“右近が一戦にも及ばず逃走した”と、あなたが思ったのは何故(なにゆえ)ですか？ ———— とたずねたいですね。

時は1583年・天正11年、「賤ヶ岳の合戦」の前哨戦で、琵琶湖のすぐ北側にある余呉湖を囲む、大岩山を、中川清秀が、そして峰続きの岩崎山を、高山右近の軍が、陣をかまえて守っていました。そこへ、柴田勝家側の、佐久間盛政の軍が奇襲をかけてきたのです。

この時、もしも、高山右近が、中川清秀を見殺しにして、戦わずに逃走して、味方の羽柴秀長の陣にかけこんだというのが本当だったとしたら……

もしも、そのような重大なことが事実だったとしたら、あの厳しかった豊臣秀吉自身が、右近をゆるしておくはずがありません。後日、右近は、秀吉から厳しい叱責を受けたんでしょうか？

援軍を出さなかった他の人は叱責を受けていますが、右近に関しては、そんな事実はなく、右近は、その後、秀吉が信頼する武将の一人になっていったのです。

宣教師フロイスは、手紙の中で、「この時、秀吉は右近に対し、彼が一身を危うし、多数の手兵を失い、秀吉のために尽くしたことを、言葉を

尽くして感謝し、また親愛の情をしめした。」と伝えています。

一戦もまじえずどころか、右近はこの時の戦いで、妻・ジュスタの二人の兄弟と、ジュスタの母・マリアの後添え(のちぞえ)となった人、そして高槻の、身分の高い武士の多数を戦死させてしまっています。

右近に悔いが残ったとしたら、むしろ、こちらの方でしょう。

後(のち)の日のために退いたとはいえ、多くの忠臣の部下たちを死なせてしまい、自分は生き残ったのです。心が痛まなかった、などということが、ありようはありません。

城主・右近にとって、多くの犠牲を出した、唯一とっていい、敗戦の戦いだったのです。

「賤ヶ岳の戦い」における右近について、私が、信憑性(しんぴょうせい)が高く、重要な歴史史料だと思っていますのが、「中川氏御年譜」という記録です。

これは、中川清秀他、中川家の歴代藩主の業績を記し、編纂されたものです。

勿論のことですが、中川清秀に関していえば、その武勇、武徳を賞讃したものです。

もし、高山右近が、中川清秀を見殺しにして、自分だけ助かって逃げ出したのだとしたら、この「中川氏御年譜」は、江戸時代、文化年間に編纂されたものですから、キリシタン大禁教下、この時とばかりに、さんざん、右近の悪口を書き並べ、右近を非難しているのでしょうか？

ところが、びっくりするほどに、そんな様子が、いっさいありません。

右近が卑怯なことをしたですって？ それ一体、なんの話？ —— という感じです。

「羽柴殿 志津ヶ嶽砦、所々 巡見あり。太祖(“たいそ”というのは、中川家 初代藩主・中川清秀のことです。)、並びに高山右近に命じ、大岩山・岩崎山に急に向城(むこうじろ)、普請致し、相守るべきとなり。」

賤ヶ岳に陣を構えていた桑山重晴は、敵の来襲の報を受けるやいなや、中川・高山に使いをやって、みな賤ヶ岳の本陣に集合して防禦(ぼうぎょ)に備えるように、と勧めます。

「此時、志津ヶ嶽の本城を守る桑山修理、使いを以て、御当家と高山とが營(陣のこと)に言わせけるは、御砦要害、未だよからず。急ぎ本城に御つぼみあるべし。一所(ひとところ)にて防ぐべし、と言う。高山 同心して、志津ヶ嶽につぼむ事 然るべき旨、同じく使いを以て申し越す。」

右近は同意して、清秀の所に使いを送りますが、清秀は、戦うことを主張して、従いません。右近は再三、使いを送り、説得しますが、清秀は、ガンとして、同意しません。

ついに、佐久間軍が攻め来たり、まず攻撃を受けた大岩山の中川軍の所に「高山が軍士も来り、入れ替りて戦ふ。」とありますから、中川・高山勢が一緒になって戦いが続きます。

しかし、多勢の佐久間軍は次々、新手(あらて)の兵と入れ替わって攻めてきます。このまま戦いを続ければ、全滅するだけです。援軍もやって来ません。

右近は、ひとまず後ろに退き、決戦を後日に延ばすようにと、清秀に勧めますが、彼は聞こうとしません。

「高山、使いを以て申し送りけるは、軍(いくさ)は此の度に限るべからず。ひとまず引き退き、後日に功を立て給へと言う。御(おん)答(清秀の答え)は、大(おお)臆病の輩(やから)に何ぞ組すべき。」だったのです。

「此時、高山も終(つい)に崩れて己が砦を捨て、木ノ本指して落ち行き」、一方、中川清秀の方は、重傷を負い、勝つすが無いのを見て、切腹して果てたのです。

( ※ 古文の引用は、すべて「中川氏御年譜」より )

このようにして、中川清秀は戦死し、右近は生き残りました。

「軍(いくさ)は、このたびに限るべからず。ひとまず引き退き、後日に功を立て給へ。」と清秀に勧め、生き残った右近を、臆病者・卑怯者と見るのか、あるいは、右近の思慮深さとみるのか。

あとは、皆さんで考えて、判断なさってみてください。